

Ⅱ. メシアの王国における信者の生活ルール

□ 「メシアの王国」について

■ アウトライン

1. イザヤ 2 : 2~4
2. イザヤ 11 : 6~9
3. イザヤ 67 : 17~25
4. ミカ 4 : 1~3
5. メシアの王国における生死 (イザヤ 65 : 20 の解説)
6. メシアの王国における統治体制

1. イザヤ 2 : 2~4 *終わりの日に、主の家の山は山々の頂の上に堅く立ち、もろもろの丘より高くそびえ立つ。そこにすべての国々が流れて来る。多くの民族が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家の上ろう。主はご自分の道を私たちに教えてくださる。私たちはその道筋を進もう。」それは、シオンからみおしえが、エルサレムから主のことばが出るからだ。主は国々の間をさばき、多くの民族に判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍を鎌に打ち直す。国は国に向かって剣を上げず、もう戦うことを学ばない。*

(1) 2 節「終わりの日」とは、メシアの初臨で始まり、メシアの王国の時代まで含む時期。一般的に使われる「世の終わり」とか、「終末」ではない。

(2) 2 節「主の家の山」とは、頂上に神殿が建てられる山である。

① その場所は、シオン=エルサレムである。

② メシアの王国におけるエルサレムは、世界で最も高い山となる。この地形変動は、メシアの王国が始まる前に起きた大地震 (黙 16 : 18、ゼカリヤ 14 : 4~5) によるもの。このとき、地球規模で地形変動が起きる。エルサレムの海拔高度は地上で最も高くなる (ゼカリヤ 14 : 10)。

(3) 3 節「ヤコブの神の家」、「ヤコブ」は、イスラエル民族を指す。「神の家」は神殿である。メシアの王国では、エルサレムに新しい神殿が建てられる。そして、そこには全世界から信者がやって来て、主から「ご自分の道」、すなわち信者にとっての生活ルールを覚えてもらう。

- (4) 3 節、エルサレムから全世界に向けて、「みおしえ」「主のことば」が発せられる。これは、メシアの王国における法令の役割を果たす。それを発するのは王なるメシアである（イザヤ 11：10、ゼカリヤ 14：9）。
- (5) 4 節、国家間に問題があると、「みおしえ」「主のことば」に照らして、メシアが裁きを行う。世界のすべての民族は、メシアの裁きに服する。
- (6) よって、国家間に問題が生じて、戦争になることはない。4 節、国防のための軍事力は必要なくなり、武器を製造することも、軍人を育成訓練する学校もなくなる。

2. イザヤ 11：6～9 *狼は子羊とともに宿り、豹は子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜がともにいて、小さな子どもがこれを追って行く。雌牛と熊は草をはみ、その子たちはともに伏し、獅子も牛のように藁を食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子は、まむしの巣に手を伸ばす。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、滅ぼさない。主を知ることが、海をおおう水のように地に満ちるからである。*

- (1) 人間が罪に堕ちる前のエデンの園では、動物はすべて草食であった。被造物が食い合い、殺し合うようになったのは、被造物の頂点にいた人間が罪に堕ちた結果である。
- (2) メシアの王国においては、狼、豹、ライオン、熊などの猛獣はおとなしくなって草食となり、毒蛇の毒性はなくなり、人などを咬まなくなる。
- (3) 9 節「主を知ることが地に満ちる」、メシアの王国のスタート時、国民は全員、栄光の体を持つ者はもちろん、生まれながらの肉体の者も全員、信者である。そして、彼らから生まれる次世代もそのほとんどが信者となる。人が神に従うとき、動物たちは人に従う。（注）下線部については、後述「5. メシアの王国における生死」
- (4) 9 節「わたしの聖なる山のどこにおいても」、エルサレムでは、ということ。エルサレムは、全世界の王であるメシアがおられる都であり、神殿がある場所。エルサレムとその周辺地域はイスラエル民族の地。イスラエル民族は次世代も含めて全員が信者である。よって、イスラエルの地では、すべての人が神に従うので、動物たちも人に従い、人を害することはない。（注）下線部は、後述「5.」

3. イザヤ 65 : 17~25 見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。先のことは思い出されず、心に上ることもない。だから、わたしが創造するものを、いついつまでも楽しみ喜び。見よ。わたしはエルサレムを創造して喜びとし、その民を楽しみとする。わたしはエルサレムを喜び、わたしの民を楽しむ。そこではもう、泣き声も叫び声も聞かれない。そこにはもう、数日しか生きない乳飲み子も、寿命を全うしない老人もいない。百歳で死ぬ者は若かったとされ、百歳にならないで死ぬ者は、のろわれた者とされる。彼らは家を建てて住み、ぶどう畑を作って、その実を食べる。彼らが建てて他人が住むことはなく、彼らが植えて他人が食べることはない。わたしの民の寿命は、木の寿命に等しく、わたしが選んだ者たちは、自分の手で作った物を存分に用いることができるからだ。彼らは無駄に労することもなく、子を産んで、突然その子が死ぬこともない。彼らは主に祝福された者の末裔であり、その子孫たちは彼らとともにいるからだ。彼らが呼ばないうちに、わたしは答え、彼らがまだ語っているうちに、わたしは聞く。狼と子羊はともに草をはみ、獅子は牛のように藁を食べ、蛇はちりを食べ物とし、わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、滅ぼすこともない。—— 主は言われる。

- 17 節「わたしは新しい天と新しい地を創造する」・・・ここで預言されている新天新地はメシアの王国である。Ⅱペテロ 3 : 7~13、13 節の「義の宿る新しい天と新しい地」も、メシアの王国である。
- 波線部、20 節の解説は、後述「5. メシアの王国における生死」

4. ミカ 4 : 1~3 イザヤの預言の再確認
5. メシアの王国における生死 (イザヤ 65 : 20 の解説)

(1) 大患難期を生き残った人々が全員、メシアの王国に入るのか? 答えは、違う。

- ① 王国に入る条件は信者であること。大患難期を生き残った人々のうち、ユダヤ人はすべて信者になっているので、全員が王国に入るが、異邦人には信者と不信者がいる。異邦人の不信者は、王国に入れない。
- ② ユダヤ人は、メシアの再臨直前に、その時点で生き残っているすべてのユダヤ人がメシアを信じて霊的な救いを受ける。彼らは全員、王国に入る。

③ 異邦人は、不信者と信者とに分けられる。王国が始まる前に行われる「諸国民のさばき」による（ヨエル 3 : 1～3、マタイ 25 : 31～46）。

- 不信者の異邦人たちは、そのさばきの後に死んでよみに下る。そして彼らの最終的な行先は「永遠の火」（マタイ 25 : 41）＝黙 20 : 15 「火の池」
- 異邦人の信者たちは、王国に入る（マタイ 25 : 34）。

④ ①のユダヤ人と③の異邦人信者は王国が終わるまで生き続け、誰も死なない。
 （注）二重下線部については、後述（3）による

(2) 王国時代、ユダヤ人にも異邦人にも、子どもたちが生まれ、育つ。彼らの内側には、両親から引き継いだ罪の性質が引き継がれている。彼らもまた、肉体的いのちがあるうちに聖霊によって新生する必要がある。イザヤ 65 : 20 によると、百歳を超えることができずに死ぬ人がいて、そのような人は「のろわれた者」、すなわち不信者である。

- ① 王国時代においては、100歳になるまでに信じる必要がある。
- ② もし100歳までに信じなければ、生き続けることはできない。
- ③ 信じたならば、その人は王国が終わるまで生き続け、死ぬことはない。
 （注）二重下線部については、後述（3）による

- ④ エレ 31 : 34 により、王国ではユダヤ人は「小さな者（＝こども）」でも「主を知る者」、すなわち信者になると預言されている。すなわち、ユダヤ人からは不信者は一人も出ないということである。
- ⑤ 従って、王国で死ぬのは、異邦人の不信者だけである。

(3) イザヤの預言 65 : 17～25 の内容と新約聖書の最後の巻、黙示録で啓示されたことを合わせると、次の二つことが分かる。第一に、王国は千年で終わること（黙 20 : 6）。第二に、王国の信者たちは、死を経ないで、次に来る「永遠の秩序」（黙 21 : 1～22 : 5）に入ること。

- ① 「永遠の秩序」には、生まれながらの肉体では入れない。「永遠の秩序」に入るときには、栄光の体が必要である。栄光の体を受ける方法は、肉体の死を経る復活にあずかるか、肉体の死を経ないで変換されるか、いずれかである。

- ② 第一の復活は、王国が始まる前に終わっている。
- 第一の復活・・・「初穂」はメシア、2 番目に教会の信者たち（携挙のとき）、3 番目に二人の証人（黙 11：11）、4 番目に旧約聖書時代の信者たち、5 番目に大患難期の殉教者たち（黙 20：4～5）。これで第一の復活は終わる。
 - 黙 20：5 の「残りの死者は、千年が終わるまでは生き返らない」とは、第二の復活であり、幸いな復活ではない。行先は「火の池」（黙 20：15）である。
- ③ よって、王国の信者たちは、復活ではなく、変換によって栄光の体を受け取る。彼らは、メシアの王国が終わる時点か、それまでのある時点か、いずれにせよ、栄光の体に変換されるであろう。

6. メシアの王国における統治体制

- (1) 全世界の王は、メシア＝主イエスである（詩 2：6～8、24：7～10、イザヤ 9：6～7、16：5、エレ 23：5～6、33：14～17、ゼカ 14：9、ルカ 1：30～33）

(2) イスラエルの政府

- ① ダビデ・・・王（キング）であり（エレ 30：9）、君主（プリンス）である（エゼ 34：23～24）、（キングであり、プリンスである エゼ 37：24～25）
- ダビデは、イスラエルの王（キング）である。同時に、メシアの下につく君（プリンス）である。
 - メシアは、「王の王（King of kings）、主の主」（黙 19：16）である。
- ② 十二部族を治めるのは、十二使徒（マタ 19：28）・・・彼らはメシアと食卓を共にする（ルカ 22：28～30）
- ③ 君主たち（イザヤ 32：1「首長たち」、エゼ 45：8「君主たち」）・・・この区分に入る人たちのひとりが、ゼルバベルであると推測される。ハガイ 2：23「あなたを選んで印章とする」→「印章」とは指輪につける印鑑のこと、ゼルバベルを高い地位に着かせることを示唆している。

- ④ 「さばく者たち」(さばきつかさ)「助言する者たち(議官)」(イザヤ 1:26)・・・この区分に入る人たちは、特にエルサレムに置かれる。彼らの働きにより、エルサレムには不法行為は全く起きず、「正義の町、忠実な都」と呼ばれる。

(3) イスラエル以外の諸国の政府

- ① 教会の信者たちと大患難時代の殉教者たち (黙 20 : 4~6)・・・メシアの共同統治者
- 黙 20 : 4 を直訳すると次のとおり。
 - また、私は多くの座を見た。それらの上に座っている人々がいて、彼らは、さばきを与えられた者たちであった。【教会の信者たち】
 - また私は、ある人々のたましいを見た (2つのグループ)
 - ◇ イエスのあかしと神のことばのゆえに首をはねられた人々のたましい【大患難期前半の殉教者たち】
 - ◇ 獣もその像も拝まず、額にも手にも獣の刻印を受けなかった人々のたましい【大患難期後半の殉教者たち】
 - 彼らは**生きた**、そして千年間、**キリストとともに支配した**。
- ② 諸国の王たち (詩 72 : 10~11)・・・彼らは大患難期の生き残りであり、諸国をそれぞれ支配する。
- 【補足】王国の次に来る「永遠の秩序」に、彼らが入っていることも、預言されている (「地の王たち」黙 21 : 24)。